

「旧約聖書からの説教：実践的課題」

佐々木哲夫

日本基督教団信仰告白がその冒頭において「旧新約聖書は、神の靈感によりて成り、キリストを証し、福音の真理を示し、教会の拠るべき唯一の正典なり。されば聖書は聖霊によりて、神につき、救いにつきて、全き知識を我らに与ふる神の言にして、信仰と生活の誤りなき規範なり」と告白しているように、旧新約聖書全体は、正典なる聖書であって、旧約聖書と新約聖書のいずれを選んで説教を行うとしても本質的に相違することはない。しかし、旧約聖書から説教を行う場合、少なからず実践的諸問題に直面する。例えば、士師記には、戦争、殺人、放蕩、謀反など聖書に相応しくないとと思われる場面や物語が数多く記載されており、信仰者にどのような恵みを与えるのかと考えさせられてしまう。現代の文化や倫理だけでなく士師や編集者が生きた時代の歴史や文化の文脈を考慮しなければならないのである。また、ヘブライ語本文の釈義、ヘブライ的表現技法や旧約神学の知識など総合的な知見が要請され、かなりの時間と労力を費やさねばならない。しかし、そのような労苦は、新約聖書からの説教においても同じである。

本稿は、東北学院大学文学部総合人文学科主催の第6回教職研修セミナー「旧約聖書と説教」における講演「旧約聖書からの説教：実践的課題」の内容に基づきつつ、旧約聖書から説教する場合の実践的諸問題について概観するものである。

1. 旧約聖書から説教への過程

説教は、講義や講演と異なる。すなわち、学問的知識を伝達する発話行為でもなく、また、体験談（旅行、読書、日常）を披露する発話行為でもない。では、説教とはいかなるものなのか。既に、加藤常昭氏が示唆に富む考察を提示しており、以下において、その概要を引用しつつ、若干の論考を加えたい。

(1) 聖書朗読と説教との関連

朗読された聖書箇所と語られた説教との関連について、氏は、「一般的なこととして、聖書は、常に説教を聞かなければわからないということになるわけではない。もしそうでなければ、一般にキリスト者がひとりで聖書を読むときにも、必ずそれに添えて説教を読まなければならないことになる。…ひとりで、聖書だけを読んでもわかるのである」と解説し、「礼拝を礼拝たらしめる〈神が語る〉という出来事が起こるために、特に召されて神の言葉に仕える職務につく者が、そこでいかなる言葉を語るのかということなのである」と説いている¹。朗読された聖書箇所から敷衍して自説を開陳したり、次々と引用する聖書箇所を流転する話は「いかなる言葉を語るのか」という視点から再考を要するものとする。

(2) み霊の働きがなければならない

〈神が語る〉説教について、加藤氏は、さらに「聖書の言葉が、このわれわれの説教を通じて、今ここにおいて現実聞くも者の存在を捉え、生かす言葉となるためにはみ霊の働きがなければならない」と説く²。み霊の働きは、聖書の言葉を説教者自身の霊的・内的な言葉とするものであり、それゆえ、説教準備の段階で既に何らかの意味で説教者と一体化されている。換言するならば、説教の言葉によって説教者自身が教えられ養われることが前提なのである。

(3) 聞く者に届く言葉

聖書の言葉と説教者が一体化されるということは、聖書の言葉をただ単に朗読・反復するというのではなく、新しい言葉での言い換え、付け加え、強調などの手続きによって、聞く者の言葉にされなければならないという。すなわち、「聖書の言葉は、過去に記されたものであるが、それがまさにその時における神の言葉の出来事の証言であるが故に、今ここでわれわれと共に、われわれのために起こる神の出来事の証言ともなる」というのである³。換言するならば、聖書の言葉に先行して、言葉が指し示す出来事があるのであって、その原事実を証言するために想像力を働かせ、聞く者に届く言葉として語るというのである⁴。想像が、聖書の言葉に準拠していることは無

¹ 加藤常昭『説教論』日本基督教団出版局、1993年、328頁。

² 『説教論』329頁。

³ 『説教論』329頁。

⁴ 並木浩一『聖書の想像力と説教』説教塾ブックレット8、キリスト新聞社、2009年、34～48頁。

論のことである。聞く者に届く言葉は、出来事についての証言であるから、空虚な巧言令色の言葉であってはならない。

(4) 説教は教會的行為

説教者という職務も聖書正典信仰ももとは教會において成り立っているものであり、その意味において、説教は実に教會的行為なのである⁵。教派的伝統が、説教にその教派の特色を与えていることは実感するところだが、そのような教派的特色を越えてもなお説教は教會的行為なのである。換言するならば、説教は牧会とともにあるべきものと解される。牧会は、届けられた聖書言葉を、聞く者のうちに実存的に受肉させる。学校礼拝で語られる説教も、教會に連なる教會的行為であり、聴衆への牧会が要請される。

(5) 神の言葉は歴史的・地上的現実に関わる

説教は、聞く者の内に神の言葉を受肉させるとしても、それは、理性や魂の中の出来事にとどまるものでなく、肉を含む全存在、すなわち、歴史的・地上的現実に関わるものであるという⁶。説教は、着座している聴衆に語りかけるという時空的制約を帯びた発話行為ではなく、その場を超越する行為、すなわち、この世において神の言葉を公に宣告する行為である。それゆえ、説教は、教會や学校という場、また、少数や多数という聴衆の規模に左右されることのない超越的使命を帯びている。

(6) 証しの文学としての聖書と説教の関わり

説教の課題に関する暫定的な結語として加藤氏は最後に「その上で言わなければならない。聖書と一体化する説教とは、その文体、語り口、構造においても聖書的であるはずである。聖書が何らかの意味で、歴史の中に生まれたひとつの文学であるとするれば、説教もまたそのような意味において文学的な言葉となる」と説く⁷。すなわち、「説教が文学的な言葉を語ることに、語らざるを得ないことは、説教が解き明かす聖書が文学的な言葉を語ることによる」というのである⁸。聖書の言葉が、証言として語られているならば証言として、物語であるならば物語として、詩歌であるなら詩歌として、

⁵ 『説教論』 330 頁。

⁶ 『説教論』 331 頁。

⁷ 『説教論』 332 頁。

⁸ 加藤常昭『文学としての説教』日本キリスト教団出版局、2008年、87頁。

説教するというのである。すなわち、「何を語るか」と同時に「いかに語るか」が同時に問われるのである⁹。換言するならば、説教者の神学と共に文章能力・表現能力も問われるのである¹⁰。

さて、旧約聖書から説教への過程として、(1) 聖書箇所を選択する、(2) 本文を釈義する、(3) 説教を文章化する、(4) 説教を行う、との過程が概観される。特に、(1) では講解型説教か主題型説教か、(2) では通時的解釈か共時的解釈か、(3) では書き言葉ではなく話し言葉としての文章化、(4) では学校礼拝か特別伝道礼拝かなどの状況把握が課題とされる。いずれの段階においても、祈りと瞑想が支配的であらねばならぬことは無論のことである。

2. 聖書箇所の選択

2011年11月に開催された日本旧約学会秋季大会のシンポジウム「旧約学と説教」において越川弘英氏は「今日の礼拝と説教における旧約聖書の位置づけと活用」と題して発題を行い、興味深い統計を提示している¹¹。日本基督教団を中心とするプロテスタント諸教会から100教会の礼拝を無作為に抽出し、2001年から2009年までの間の礼拝プログラム（週報）を収集し、旧約聖書活用の実態を調べたのである。その結果は、新約聖書のみを用いる礼拝が64例、旧約聖書のみを用いる礼拝が5例、旧約聖書と新約聖書を用いる礼拝が31例だったという。旧約聖書のみを活用は少ないものの、何らかの形で旧約聖書が朗読されている例は、全体の三分の一以上になっている。特に興味深いことは、講解型説教や主題型説教ではなく教会暦に基づく日課型説教において、すなわち、聖書主義を標榜してきたプロテスタント教会よりもカトリック教会や聖公会の方が、毎回の礼拝において新約聖書と旧約聖書をまんべんなく選択しているという事実であった。これは、説教者がいずれの説教型を選ぶにしても、正典である旧約聖書から説教する意義について再認識させてくれる事実である。

⁹ 藤原導夫『まことの説教を求めて—加藤常昭の説教論—』説教塾ブックレット11, キリスト新聞社, 2012年, 89頁。

¹⁰ イエス・キリストは、ナザレの会堂においてイザヤの巻物を渡されて朗読した後、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話しを始めている（ルカ4:16～22）。預言の言葉を預言の言葉として語っている。

¹¹ 越川弘英「今日の礼拝と説教における旧約聖書の位置づけと活用」『旧約学研究』9（2012年）43～45頁。

さて、旧約聖書からの説教を意識するうえにおいて考慮したいことは、朗読箇所として選択する新約聖書の箇所が旧約聖書からの引用を含む場合である。特に、引用箇所が、旧約聖書とどのような関連にあるかに留意したい。ところで、旧約聖書引用箇所の同定において、いささか見解の相違がある。例えば、研究者たちは、旧約聖書からの引用箇所として、613箇所、1,640箇所、4,150箇所を挙げ、また、ネストレ版ギリシア語新約聖書は950箇所、連合聖書協会版（UBS）ギリシア語新約聖書は2,500箇所を数えている¹²。

このようなばらつきは、旧約聖書引用の型の相違に由来している。すなわち、(1) 明確な引用（formal quotation）、(2) 暗示的な引用（allusion）、(3) 意識的引用（paraphrase）、(4) その他、などの型の相違に由来している¹³。以下に引用の型について略述する。

(1) 明確な引用とは、「聖書に書いてあるとおり」などの表現によって引用される場合である。イエス・キリストの言葉とされている箇所においても30箇所ほどこの型の引用が見られる。例えば、

イエスは言われた。「聖書にこう書いてあるのを、まだ読んだことがないのか。『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。これは、主がなさったことで、わたしたちの目には不思議に見える。』（マタイ 21：42）

家を建てる者の退けた石が隅の親石となった。これは主の御業、わたしたちの目には驚くべきこと。（詩篇 118：22-23）

(2) 暗示的な引用とは、旧約聖書の語句が新約聖書の言葉の中にとけ込んでいる場合である。イエス・キリストの言葉とされている箇所においても25箇所ほど見られる型である。例えば、

¹² Walter C. Kaiser, Jr, *The Uses of the Old Testament in the New*, (Chicago : Moody Press, 1985), 2.

¹³ Robert G. Bratcher, ed., *Old Testament Quotations in the New Testament*, revised ed, (The United Bible Societies, 1967). 引用箇所が対比されており、allusionを(A)またparaphraseを(P)の記号を付して区別している。

柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。(マタイ 5: 5)

貧しい人は地を継ぎ、豊かな平和に自らをゆだねるであろう。(詩 37: 11)

(3) 意識的引用とは、「と書いてある、と命じられている」などの表現によって引用されるが、旧約聖書の言葉が言い換えられている場合である。イエス・キリストの言葉とされている箇所においても 5 箇所ほどこの型の引用が見られる。例えば、

「妻を離縁する者は、離縁状を渡せ」と命じられている。(マタイ 5: 31)

人が妻をめとり、その夫となつてから、妻に何か恥ずべきことを見だし、気に入らなくなったときは、離縁状を書いて彼女の手に渡し、家を去らせる。

(申命記 24: 1)

(4) その他とは、旧約聖書への概略的な言及である。例えば、イエス・キリストの言葉とされている箇所においても次のような記述がある。

1 そのころ、ある安息日にイエスは麦畑を通られた。弟子たちは空腹になつたので、麦の穂を摘んで食べ始めた。2 ファリサイ派の人々が見て、イエスに、「御覧なさい。あなたの弟子たちは、安息日にはしてはならないことをしている」と言った。3 そこで、イエスは言われた。「ダビデが自分も供の者たちも空腹だったときに何をしたか、読んだことがないのか。4 神の家に入り、ただ祭司のほかには、自分も供の者たちも食べてはならない供えのパンを食べたではないか。5 安息日に神殿にいる祭司は、安息日の掟を破っても罪にならない、と律法にあるのを読んだことがないのか。6 言うておくが、神殿よりも偉大なものがここにある。7 もし、『わたしが求めるのは憐れみであつて、いけにえではない』という言葉の意味を知っていれば、あなたたちは罪もない人たちをとがめなかつたであろう。8 人の子は安息日の主なのである。」(マタイ 12: 1-8)

上記の 3 節と 5 節の「読んだことがないのか」の箇所を *Old Testament Quotations in the New Testament* は、引用箇所として掲げていない。しかし、以下の旧約聖書の箇所

について言及していることは明らかである。

ダビデは立ち去り、ヨナタンは町に戻った。ダビデは、ノブの祭司アヒメレクのところに行った。ダビデを不安げに迎えたアヒメレクは、彼に尋ねた。「なぜ、一人なのですか、供はいないのですか。」ダビデは祭司アヒメレクに言った。「王はわたしに一つの事を命じて、『お前を遣わす目的、お前に命じる事を、だれにも気づかれるな』と言われたのです。従者たちには、ある場所で落ち合うよう言いつけてあります。それよりも、何か、パン五個でも手もとにありませんか。ほかに何かあるなら、いただけますか。」祭司はダビデに答えた。「手もとに普通のパンはありません。聖別されたパンならあります。従者が女を遠ざけているなら差し上げます。」ダビデは祭司に答えて言った。「いつものことですが、わたしが出陣するときには女を遠ざけています。従者たちは身を清めています。常の遠征でもそうですから、まして今日は、身を清めています。」 (サム上 21: 1-6)

アロンはイスラエルの人々による供え物として、安息日ごとに主の御前に絶えることなく供える。これは永遠の契約である。 (レビ 24: 8)

因に、マタイ福音書 12 章 7 節は、ホセア書 6 章 6 節からの明確な引用であり、*Old Testament Quotations in the New Testament* もそのことを明示している¹⁴。

3. 旧約釈義の実例

説教を担当する者は、聖書の言葉についての質問を少なからず受ける。そのような質問は、聖書本文釈義を現実に応用する絶好の機会であり、積極的に対応することになっている。先般も、詩編 51 編 18 節～19 節に関し質問が寄せられた。

もしいけにえがあなたに喜ばれ、焼き尽くす献げ物が御旨にかなうのなら、わたしはそれをささげます。しかし、神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。打ち砕かれ悔いる心を、神よ、あなたは侮られません。 (詩 51: 18～19)

¹⁴ *Old Testament Quotations in the New Testament*, 7.

この箇所は、三浦綾子が「事情はよく知らなくても、はなはだ心うたれ、強く心惹かれた。打ち砕かれた謙遜な魂の叫びは、わたしたちの心を感動させずにはおかないのであろう」と評しているように、多くの読者の心をとらえる箇所である¹⁵。さて、質問は、新共同訳と口語訳の訳文が異なるのは何故かというものであった。口語訳では、16節～17節が対応しており、以下のとおりである。

あなたはいけにえを好まれません。たとえわたしが燔祭をささげても、あなたは喜ばれないでしょう。神の受けられるいけにえは砕けた魂です。神よ、あなたは砕けた悔いた心を、かろしめられません。

特に、問われたのは、前半部分である。

もしいけにえがあなたに喜ばれ、焼き尽くす献げ物が御旨にかなうのなら、わたしはそれをささげます。
(新共同訳)

あなたはいけにえを好まれません。たとえわたしが燔祭をささげても、あなたは喜ばれないでしょう。
(口語訳)

比較すると、両者の意味は反対ではないかとの印象を受ける。因に、英訳は、For thou desirest not sacrifice ; else would I give it : thou delightest not in burnt offering. (KJV) である。マソラ本文は以下のようにになっている。

תִּרְצֶה	לֹא	עוֹלָה	וְאֶתְנֶה	וְנָח	לֹא-תִחַפֵּץ	כִּי
you desire	not	offering	I give and	sacrifice	you delight	not for

直訳を試みるならば、以下のようになる。

¹⁵ 三浦綾子『旧約聖書入門』光文社、1974年、218頁。

あなたは、確かに、いけにえを喜ばない、私がささげても。
 焼き尽くすささげものをあなたは望まない。

直訳は、口語訳に類似である。ところで、BHS の欄外に LXX (『七十人訳聖書』) の読みに関する注が付されている。それを手がかりに LXX を参照すると、LXX は、 \aleph を \aleph に、すなわち、 \aleph 「もし (if)」に読み替えていることがわかる。LXX は以下のとおりである。

ὅτι εἰ ἠθέλησας θυσίαν, ἔδωκα ἅν
 ὀλοκαυτώματα οὐκ εὐδοκῆσεις.

For if you desire sacrifice, I would have given it,
 whole-offerings you do not desire.

ここで興味深いことは、LXX は、最初の、 \aleph を \aleph に解して *ei* と訳するが、二つ目の \aleph は、 \aleph ではなく \aleph のまま、すなわち、*oúk* と訳出している。他方、新共同訳は、「もしいけにえがあなたに喜ばれ、焼き尽くす献げ物が御旨にかなうのなら、わたしはそれをささげます」と訳出しているように二つの \aleph ともに \aleph に解していると推察される。ここに至り質問者に答え得る内容が整ったのである。

4. 釈義から説教へ

前述のような釈義の過程は、説教の材料を提供するものであり、材料であるがゆえに、聖書研究会ならまだしも、説教において披露することは極力自制すべきである。むしろ、聖書本文を釈義する過程において、並木浩一氏が指摘するとおり、言葉に先行する出来事を想像することが大切である¹⁶。

聖書においては出来事が言葉に先行する。聖書の読み替えにも関係します。読み替えは言葉が主役です。想像力は言葉によって触発されます。ですから想像力だけを問題にすると、勝手な読み方になってしまうし、言葉が独立し

¹⁶ 『聖書の想像力と説教』 34 頁。

た意味を持つのです。しかしそうなのは具合が悪い。聖書はそうではない。実は「言葉」が重要なだけけれど、その前に「出来事」があるのです。方向を逆に見れば、出来事があるから、それを受け止めるために豊かな言葉が形成されてきた。それをさらに読み替えるために想像力を働かせなければならぬ。それが意味を発揮する。聖書神学的な根拠付けとなるでしょう。

聖書の言葉から出発し、想像力に導かれて出来事にたどり着く。その後、再び、出来事から出発し、説教の言葉へと巡回する。しかし、そのような道程を辿るとしても、氏が指摘するように、それは言葉との関連における想像力であって、言葉から離れての想像は勝手な読み方、もしくは、似て非なる出来事に到達することになる。あくまでも、聖書の言葉との結びつきが前提である。

以前に質問された章句があるので、その聖書箇所を事例として取りあげつつ論考を進めたい。聖書箇所は、マタイ福音書 5 章 3 節である。

心の貧しい人々 (οἱ πτωχοὶ) は、幸いである、天の国はその人たちのものである。

(マタ 5: 3)

「心が貧しい」とは、日常の日本語では「心底が卑しい」とか「さもしい」など品性が下劣なさまを表現する言葉として使われるが、聖書は、それを幸いだと言っているのは何故かと質問されたのである。そこで、注解書を参照してみると、以下のような説明が記されている¹⁷。

自らの内に救いの可能性を全く認め得ない人々、神にのみより頼まざるをえないことに気づいている謙虚な人々を指す。それはイザ 61・1 以下の約束が実現される終末の時が始まったという宣言の言葉である。

「心が貧しい者」とは「謙虚な人々」であるとの説明である。そのことを保証する聖句としてイザヤ書 61 章 1 節以下が挙げられている。

¹⁷ 橋本滋男「マタイによる福音書」『新共同訳新約聖書略解』日本基督教団出版局、2000 年、34 頁。

主はわたしに油を注ぎ、主なる神の霊がわたしをとらえた。わたしを遣わして、貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。打ち砕かれた心を包み、捕らわれ人には自由を、つながれている人には解放を告知させるために。 (イザ 61: 1)

ここで注目するのは「貧しい人」との記述である。当該箇所のマソラ本文は以下のとおりである。

עֲנָוִים	לְבַשֵּׁר	אֵתִי	יְהוָה	מָשַׁח
meeks	to bring news	me	the Lord	anointed

直訳すると「主は、貧しい者たちに良き知らせを伝えるために、私に油を注いだ」となる。「貧しい者たち」と訳出されている עֲנָוִים は、“poor, weak and afflicted”を意味する語であるが、“humble, lowly, meek”などの意味も有する¹⁸。確かに、LXXは、עֲנָוִים に πτωχοι のギリシア語を充てている。それゆえ、マタイ福音書5章3節の「貧しい人々 (οἱ πτωχοὶ)」を読む場合、ユダヤ的感覚において עֲנָוִים を連想し、「謙虚な人々」と解することには根拠があると言える。

ここから聖書の言葉を手がかりに想像力を働かせてみたい。同じく עֲנָוִים が使われているイザヤ書29章19節に注目する。

苦しんでいた人々は (עֲנָוִים) 再び主にあって喜び祝い

貧しい人々は (אֲבִיּוֹנֵי) イスラエルの聖なる方のゆえに喜び躍る。(イザ 29: 19)

散文においても同義的並行法構造は観察される。同義的描写は、さらに、19節を含む当該文脈において展開されている。

18 その日には、耳の聞こえない者が、書物に書かれている言葉をすらすら聞き取り、盲人の目は暗黒と闇を解かれ、見えるようになる。19 苦しんでいた人々は再び主にあって喜び祝い、貧しい人々は、イスラエルの聖なる方のゆ

¹⁸ BDB [F. Brown, S. R. Driver and C. A. Briggs, *A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament* (Oxford: Clarendon, 1907.)], 776.

えに喜び躍る。20 暴虐な者はうせ、不遜な者は滅び、災いを待ち構える者は皆、断たれる。21 彼らは言葉をもって人を罪に定め、町の門で弁護する者を罠にかけ、正しい者を不当に押しつける。(イザ 29: 18-21)

貧しい者や苦しんでいる者たち、すなわち、虐げられている者たちへ与えられる解放の喜びが描写されているのである。それは、イスラエル回復の希望に溢れる喜びでもある。マタイ福音書 5 章 3 節の「心の貧しい人々 (οἱ πτωχοὶ) は幸いである」の章句にイスラエル歴史の深遠に連なる想像が与えられた思いがする。

5. 旧約聖書から説教する意義

旧約聖書から説教する意義に関し、荒井章三氏の文章が示唆を与えてくれる¹⁹。

キリスト教会はユダヤ教の正典を否定することはなかった。教会は自明のこととして旧約聖書を用いたのであり、それを彼らの信仰の重要な根拠の一つと見なしていた。少なくとも、「ルカによる福音書」二四章四四節の「イエスは言われた。『わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。』』という記述は、「ルカによる福音書」が成立したと言われる後八〇年のルカを取り巻く原始キリスト教会が、「律法」、「預言者」、「諸書」という順序で書かれた聖書、つまりユダヤ教が使用していたタナッハを利用したことを示唆している。……そもそも、イエスがキリストであるという信仰の命題は、旧約聖書なしには理解できなかつたからである。

新約聖書だけでなく旧約聖書の言葉もまた礼拝において朗読され、説教の言葉として告げられることは、実に、キリスト教の福音をこの世に公に宣言する行為であり、信仰告白を具現化する出発を告げることである。また、それは、「聖書の六十六冊を正典として告白することは、キリスト教と他の宗教を区別するだけでなく、キリスト教全体の一致を示す重要な帯といえる」ことなのである²⁰。

¹⁹ 荒井章三「旧約聖書とは何か」『旧約聖書を学ぶ人のために』世界思想社、2012年、18-19頁。

²⁰ 倉松功『キリスト教信仰概説』聖学院大学出版局、1993年、16頁。